

去る六月三十日、軍事休戦委員会が開かれていた板門店で、アメリカ兵と北朝鮮兵とのあいだに殺気だった乱闘事件が起こり、重傷者が出た。

同じ日に、韓国政府当局は、韓国南部の光州市に北朝鮮武装ゲリラ二人が上陸し、うち一人を射殺した旨を公表した。

サイゴン陥落以後、アジアの国際情勢が大きく旋回しつつあるなかで、このころ朝鮮半島の緊張がいろいろ運伝されていただけに、右

●外交時評

板門店で感じたこと

中嶋嶺雄 (東京外国語大学助教授)

のような報道に、多くの注視が集まったためである。

たしかに、朝鮮半島の緊張が叫ばれるだけの背景は存在する。「タイム」誌が「朝鮮・新しい危険」と題して、「ニューズ・ウィーク」誌は「朝鮮・緊張の時期」と題して、それぞれ六月三十日号で特集していることも、問題の重要性を示唆するものであろう。しかも、この六月二十五日は朝鮮戦争はつぎ二十五周年であっただけに、四半世紀という歳月が流れながら、な

お依然として事態の解決がみられない朝鮮半島問題の、厳しくも重い意味を確認させずにはおかなかった。

今回、朝鮮半島の危機が叫ばれる理由は、いふまでもなく、国際的な危機の連動性が高い今日、インドシナ半島の事態が朝鮮半島に飛び火するのではないかとみなされたことにある。アジアの冷戦構造がそのまま残っている地域は、台湾海峡を特殊な例外とすれば、いまや朝鮮半島のみになってしまっただけに、このような想

定は無理なことではない。

そのような折しも、去る四月中旬、金日成主席は訪中して「武装南進」をほのめかした。一方、朴大統領は、このような状況に直面して、第九号緊急措置を施行し、反共・総力安保の国民総動員体制が韓国では形成された。アメリカは、フォード大統領、キッシンジャー國務長官、シュレジンジャー国防長官らの首脳が韓国への防衛公約を相次いで強調し、韓国への戦術核配備をも公表して、北の脅威に備える姿勢を示した。



このようにして、朝鮮半島をめぐる緊張はにわかには高まったようであり、さらに今秋の国連総会での朝鮮問題討議を控えて、いくつかの動きも出るであろう。日米など六カ国の在韓国連軍司令部(UNC)解体決議案は、米軍の継続駐留をねらったそのような動きの一つだし、アメリカでは、米・中・ソ・日四大国による朝鮮半島安全保障案も論議されている。

だが、これらのすべての背景や動きにもかかわらず、われわれとしては、はたして朝鮮半島がインドシナ半島と同じ状況なのかを冷静にみきわめ、朴政権とチュン政権の能力を比較検討し、なによりも、米、中、ソ三大国が朝鮮半島の現状維持をこそ求めざるを得ない今日の国際環境をリアルに見つめてゆかなければならない。中ソ対立下の今日の中国が、朝鮮半島での第二の動乱を望むべくもないことも明白である。

私は、この六月初旬、板門店の軍事休戦委員会会場を訪れる機会を得たばかりである。それだけに六月三十日の事件は、私にとってもショックであったが、私が板門店で感じたことは、諸般の状況からして、当面、第二の朝鮮戦争はあり得ないということであった。「タイム」や「ニューズ・ウィーク」の特集も、そのセンセーショナルなタイトルにもかかわらず、内容的にはほぼ同じ結論を下しているように思われる。